

「秋田大学研究者海外派遣事業」帰国報告書

平成 25 年 10 月 4 日

所属・職名：教育文化学部・教授

氏名：Emma Simona Morita

派遣期間：平成 25 年 3 月 16 日～平成 25 年 9 月 27 日

派遣研究機関名：英文 University of Almeria

：和文 アルメリア大学

研究課題：Sense-Constitutive Sign Functions and Their Relevance for a Typology of Poetic Texts – a Contrastive Approach

意味を構築する記号機能：詩的テキストの類型との関連性（言語対照の観点から）

○研究概要（2000字程度）

私は研究のために、E.Coseriu（チュービンゲン大学）の言語理論を使っています。そして、ヨーロッパ諸国のドイツ、スペイン、ルーマニア、イタリア、フランス、スイスなどの大学に勤務している言語研究者が、同じ言語理論を用い、いわゆる研究グループを形成しています。私もその一員ですが、自然科学系の共同研究に見られるような共著論文を書くというのではなく、同じ理論を使って言語の様々なレベルと現象を体系的に研究するグループという形態です。したがって、発表する論文はほとんどが単著です。今回、訪問しているアルメリア大学の Martinez 教授も同様にコセリウ言語理論を使い研究し、彼が組織しているスペインの研究グループに登録し、活動しました。

今回の研究者海外派遣期間中に執筆した論文には二つのタイプがあります。一つは、言語における解決できていない特定のテーマに関して、様々な言語理論の観点から説明を試みる専門誌やワークショップにおいて、コセリウ言語理論を用いた観点で発表しています（後述論文リストの番号 3, 4, 準備中の論文 5, そして口頭発表の分）。もう一つは、コセリウ言語理論の全体（言語哲学、言語学史、歴史言語学、文法理論、語彙論、テキスト言語学、翻訳学など）に焦点を当てた論文集に、私の専門分野であるテキスト言語学と類型論をテーマにした内容で発表しています（後述論文リストの番号 1, 2 と準備中の論文 6）。前述のようにあくまでも私個人の研究テーマに沿った内容であり、発表する論文は単著になります。

これまでの研究における私の主たる関心ごとは、コセリウ言語理論をさらに発展させた新しいテキスト類型論モデルの構築です。今回は新たにスペイン語のテキスト分析を加える目的で、

データを収集し、特に、翻訳プロセスにおいて、英語で書かれた内容が、スペイン語に翻訳される過程で、意味の創造されるプロセスについて分析しました。具体的には Walt Whitman の詩を題材にし、英語テキストの中で創られた世界観が、スペイン語に翻訳される過程で、二つの言語構造の違いによって、どの程度それに変化がみられるか、分析することです。そうすることで、二つの言語構造の特徴を明らかにすることができ、そして同時にテキストレベルでの意味の構築に、二つの言語の違いがどのような影響を及ぼすか、そして逆に、どのようなストラテジーを使って言語の構造の違いを乗り越えているか、これらの観点を明らかにすることが、今回の研究の主な目的でした。

まず、今回の研究の第一段階では、Walt Whitman が残した多くの詩がすべて翻訳されているわけではないため、研究のため選んだ箇所が翻訳として出版されているかどうかスペイン語の翻訳書をリサーチしました。第二段階として、入手した翻訳書とオリジナルである英語版を対照分析し、研究のために必要なアンケート調査内容と項目を確定し、実際に学生からデータを取りました。第三段階では取得したデータを分析することに費やし、同時に論文の執筆を始めました。得たデータには多くの情報が含まれているため、それを詳細かつ深く分析すると、アンケート調査の一項目だけでも、一論文となる内容になるため、順次焦点を定めて投稿し始めました。

この目的のために、詩人が言語使用による意味創造の可能性を最大限に引き出した表現の中でも、特に意味解釈が困難な箇所を選択的に取り上げ、その箇所について対照言語学的アプローチをとって分析しました。そして、スペイン語を母語としている学生が、その翻訳箇所を読み、どのような解釈が可能か、アンケート調査からデータを取りました。

今回、スペインに来る前から構想していた論文のテーマも、一貫してテキスト類型論と意味の創造プロセスに関するもので、アルメリア大学でリサーチを開始するのと並行して、毎日、集中的に論文の執筆に取り組む時間的余裕を得ることができました。その結果、今回の研究者海外派遣制度の成果として、3月末から9月の約半年間に、計4つの論文を執筆し、それぞれを投稿し、すでに受諾され、No. 1の論文は9月に出版済みとなり、それ以外は現在 in-print の状態です。以下がその論文となります。

1. Tipologia textelor poetice elaborată de Mircea Borcilă: semnificație și perspective de aplicare [“Mircea Borcilă’s typology of poetic texts: significance and application perspectives”], in: “Limba română”, no. 5-6, 2013, Chișinău (Moldavia), pp. 31-43.

2. Towards a Definition of «Textual Constitution» in the Framework of Integral Linguistics, in: Bojoga, Eugenia / Boc, Oana / Vilcu, Cornel (eds.), Coseriu: Perspectives contemporaines, vol. II, Cluj-Napoca:

Presa Universitară Clujeană, 2013, 15 pgs.

3. What makes you say so? On the types of motivation in the domain of expressive competence, in: “Energiea” V, 2013, Tübingen, 29 pgs.

4. Translation as the Unfolding of an Intertextual Evocative Relation: Functions of ‘Interpolated’ Sequences in Ion Barbu’s “Richard III”, in: “Concordia Discors, Discordia Concors” IV, 2013, Suceava, 30 pgs.

これら論文執筆以外に、5月にはフランスの Tours 大学から招待を受け、テキスト言語学の分野に関するワークショップで、コセリウ言語理論の観点から発表する機会がありました。以下がその際に発表したテーマです。

Unités constitutives du texte et unités du sens: Quelques considérations à partir du modèle de Coseriu [“Text-constitutive units and sense units: Some considerations starting from E. Coseriu’s model”], paper delivered at Journées d’étude: “Les frontières du discours: catégories, unités et procédés” [“The frontiers of discourse: categories, units, devices”], François Rabelais University, Tours (France), 23-24 May 2013

その発表内容と質疑応答の動画が Tours 大学の web ページに掲載されていますので、以下にそのサイトを紹介しておきます。30分の発表とその後10分間の英語とフランス語での質疑応答です。

<http://lettres.univ-tours.fr/actualites/emma-tamaianu-morita-354382.kjsp>

また、このワークショップ参加者による論文集を作成するため、現在、開催者がドイツとカナダの専門誌と交渉中です。そのために必要な投稿論文用の要旨をフランス語で、すでに提出済みです。今後、専門誌が決定すれば、投稿規定に沿った形で論文を執筆することになるため、以下が5つめの成果論文となる予定です。

5. Le principe de la «double articulation» au niveau du texte et ses implications pour l’analyse textuelle, [“The principle of «double articulation» at the level of Text and its implications for textual analysis”] in: “Zeitschrift für französische Sprache und Literatur” (Germany) or “Semiotica” (Canada), 2014

もう一つ、イタリアの Udine 大学で Coseriu 言語学学会が開催されます。通常は必ず出席していますが、今年の開催日は10月1日～2日で、この研究者海外派遣が終了し帰国する時期と重なるため、日程的に出席することができません。しかし、学会後、出版される論文集には、投稿する準備をしているため、すでにサマリーを提出し、受諾された状態となっています。した

がいて、下記の内容での実際の論文提出は、来年初頭になりますが、今回の研究者海外派遣制度による成果として、6つ目の論文発表となる予定です。

6. On the textual functions of linguistic innovations: Some considerations starting from E. Coseriu's "La lingua di Ion Barbu", in: Orioles, Vincenzo & Monica Brazzo (eds.), Beyond Saussure: E. Coseriu's Scientific Legacy, Udine (Italy), International Center for the Study of Plurilingualism, 2014

以上のように、半年間ほどの期間でしたが、研究だけに専念できる機会を得たことで、効果的に研究成果が出せたことを報告いたします。

○研究期間全般にわたる感想

大学教員の義務は教育と研究ですが、秋田大学で語学、特に英語教育を担当する教員の場合は、他の教員と比べて授業コマ数が多くなり、研究のための時間が制限されます。また、全学的な各種入試関連業務があり、通常勤務の状態では、研究に集中するための時間は、まとまった休みがある夏季か冬季休暇を使う以外ないのが現状です。しかし、論文の締切り等の日程は、夏休みや冬休みといったこちらの都合に合わせてくれるわけではないため、通常は深夜と休日等を利用して時間を作る以外にありません。秋田大学に勤務する限りそのような日常であるため、今回のような研究にだけ集中できる環境は、教育だけでなく研究の義務を負う大学教員にとって、非常に有意義な制度だと思います。

一つだけ懸念材料があるとすれば、昨年この制度を利用された方が指摘した為替の問題です。今回の私の場合を例にとると、日銀政策の変更のため、ちょうど円安の時にヨーロッパに来ることになりました。滞在中の為替レートと手数料を含めると、実質的には1ユーロを平均で130～145円の範囲で使ったことになりました。もし昨年、この時期にヨーロッパに来ていれば1ユーロが平均100円でした。つまり、大学からの補助は同じ金額ですが、為替の変動によって相対的には45%～30%近く円の価値が下落したため、昨年の1万円の価値が、今年は5500円～7000円の価値となりました。また滞在許可を取るためには、スペイン国内の民間保険会社との保険契約が義務付けられ、その費用なども計算に入れると、やはり為替レートは大きな懸念材料でした。この点は、前任者の指摘と同様に、再度報告しておきたいと思います。

また、e-mailというシステムがあるため、海外にいてもメール会議などでさまざまな意見を送る機会があり、そういう意味では、いわゆる学部運営に関してや事務関係の仕事は、国内での通常の勤務と変わらない状況でした。海外にいても、秋田大学の情報がリアルタイムで入るといった利点がある反面、国内勤務と同程度に、事務処理に費やす時間は多かったように思います。

アルメリア大学のキャンパス



アルメリア大学図書館



Jesus Martinez del Castillo 教授と一緒に



学生へのアンケート調査風景



フランスの Tours 大学でのワークショップ発表風景

